

なぜ「選ばれている」と

言えるのか

(一)テサロニケ一・四(一〇)

今から四年前の日経新聞の調査による覚えておきたい現代の名言の第一位はなんと「強い者が勝つのではない。勝つたものが強いのだ」だそうである。発言者はキャプテン翼のシユナイダー君、もといドイツサッカー界のリアル「皇帝」、F・ベッケンバウアー氏である。この名文句の背景を説明するとおそらく説教にならないので割愛するがこうした名文句は往々にしてエピソード(亜流・模倣)を生む。最近見たのは「優秀なのに選ばれないのではない、選ばれる人が優秀なのだ」成る程、意味深長である。

閑話休題。今朝の個所でパウロはテサロニケの信徒たちのことを大胆に神に選ばれた者と認めている。パウロ自身が神でないにも関わらず、一体なぜパウロは彼らの選びを確信できたのだろうか。理由を三つ見てみたい。

一、聖霊による「手ごたえ」

パウロがテサロニケの兄弟姉妹を真正なキリスト者と認める理由には

主観的な要素も含まれていることに注目したい。五節には「私たちの福音があったがたに伝えられたのは、ことばだけによつたのではなく、力と聖霊と強い確信によつたからです」とある。この三つの言葉の理解だが、原文の構文から考えると二番目の「聖霊」は、普通考えられる「力」との結びつき以上に「強い確信」と結びついていると考えられるそう。つまりパウロはテサロニケの町で福音宣教をしているその時に聖霊の感動とともに彼らの選びを確信したということになる。これは説教者であれば、あるいは恵まれた礼拝を体験したものであれば解る感覚である。真の礼拝には確かに「手ごたえ」がある。ことばが兄弟姉妹の心に沁み入り、そこにいのちが生まれてくる感覚、身体性があるのだ。

二、聖霊による「喜び」

第二の理由は福音を受け入れたテサロニケ教会の兄弟姉妹たちの態度の中に見える。使徒のはたらきの記述によればパウロのテサロニケ伝道は特にユダヤ教にシンパシーを感じている異邦人の礼拝者たちに対して成功をおさめたが、それは長続きはしなかった。この新しい共同体はユダヤ人のねたみを買ひ、迫害を受け、結果パウロ一行はテサロニケを後にしなけ

ればならなかった。だが、そのような状況下においてさえ、福音を受け入れたテサロニケのクリスチャンたちは喜んでいたのである。この逆説的な喜びを人間に可能にさせるのは聖霊の働きである。テサロニケを離れたパウロは、数か月一年前に起こったテサロニケ教会に満ちていた聖霊の喜びをもつて彼らが主に選ばれし者であることを確認したのである。

三、聖霊による「変革」

続く第三の理由だが、これは第一、第二以上に時の経過が必要なものだと言える。七、八節には福音を受け入れた彼らの姿がほぼ現在のギリシャ共和国全域にわたつて伝えられ、信仰の模範となつたということが書かれている。つまり彼らの聖霊体験はキャンプや聖会その場限りの熱狂に留まるものではなく、彼らの心に留まり、力を与え続け、激しい迫害の中にあつてもイエスの再臨を待ち望む希望に満ちた共同体を作り上げたのである。学者たちの推定によればこの手紙はパウロのコリント滞在中に書かれたといわれており、それはテサロニケでの伝道から数カ月一年余りの時間が経過していると考えられる。宣教者パウロは去り、迫害は続いている。しかし彼らの信仰の炎は燃え続けたのである。彼らは古い生き方にすっぱり

と別れを告げ、生ける真の神に仕え、そして復活の主を喜びをもつて待ち望んでいたのだ。そしてパウロはこの姿を模範と読んだ。原文直訳では「型」、今様にいえばロールモデルである。キリストにならつた彼らのうちにはキリストの思いと行いが満ち溢れていた。パウロが彼らの選びに太鼓判を押す理由はここにあつたのだ。

* * *

最近の若者を形容することばに「意識高い系」がある。自分を過剰に演出する割には中身が伴っていない、或いは前向きすぎて空回りしている若者をさすと言う。能書きは一流、しかし常に閉店中のラーメン屋のようなものと考えてもいいかもしれない。それに比べるとテサロニケの信徒たちの歩みは実直そのものだ。彼らの姿には自己顕示や大言壮語といったものは無縁だ。では彼らに似合う四字熟語はといえば、やはり「聖霊充滿」だ。聖霊の確信と喜びに押し出されてキリストを追い、キリストに似せられた彼らを見、パウロは彼らの選びを確信した。それは信仰箇条への同意書でも、洗礼証明書でもない。人の心を駆りたて、喜びを満ちし、人を生かす聖霊の太鼓判こそが信仰の真正性の何よりの証拠だ。聖霊の力に信頼し、選びを確認する生を貫徹したい。